

ルカの福音書 01回

献呈の辞

ルカ 1 : 1～4

1. はじめに

(1) 四福音書の特徴（前書きにヒントがある）

①マタイ

- *メシアの系図で始まる。
- *ユダヤ人向けの福音書である。
- *メシアを「ユダヤ人の王」として描いている。

②マルコ

- *前書きなしで、すぐにイエスの公生涯に入る。
- *ローマ人向けの福音書である。
- *イエスの教えよりもイエスの行動に重点が置かれている。
- *メシアを「【主】のしもべ」（イザヤ書）として描いている。

③ルカ

- *献呈の辞から始まる。
- *ギリシア人（異邦人、知識人）向けの福音書である。
- *メシアを「理想的な人（知的、肉体的に）」として描いている。

④ヨハネ

- *神学的な内容を含んだ長い前書きで始まっている。
- *教会全体のための福音書である。
- *共観福音書が書き漏らしたことを書いている。
- *行動よりも教えに重点がある。
- *メシアを「神の子」として描いている。

(2) 著者はルカである。

①ルカの福音書にも使徒の働きにも、ルカという名称は出て来ない。

②使徒の働きには、「we」セクションが出て来る。

*使 16 : 10～17、20 : 5～21 : 18、27 : 1～28 : 16

③使徒の働きとルカの福音書の著者は、ルカである。

④ルカは異邦人であったとするのが通説である。

*根拠は、コロ 4 : 14 でルカが異邦人たちの中に置かれていること。

⑤ルカはユダヤ人であったとする説もある（フルクテンバウム師）。

*ユダヤ人の習慣を知悉している。

*エルサレムに対する愛が顕著である。

(3) 講解メッセージを語る人が直面するチャレンジ

①今の時代の特徴のひとつは、「権威」に対する疑いである。

②最大の権威のひとつであるメディアに対する信頼性の欠如が見られる。

＊フェイクニュースという言葉が、盛んに使われている。

＊ジャーナリズムは、客観的報道よりも、イデオロギーを重視。

＊メディアが報じる内容を鵜呑みにできない。

③ルカは歴史家である。

＊同時代の出来事を記録しているという意味で、ジャーナリストである。

＊彼は、フェイクニュースとは無縁のジャーナリストである。

＊今私は、非常に新鮮な思いでルカの福音書に向かっている。

④私が採用するルカの福音書の解釈法は、古くて新しいものである。

＊字義通りの解釈

＊著者の意図を探ることをゴールとする解釈

＊ヘブル的枠組みを前提とした解釈

2. アウトライン

(1) 歴史家ルカ（1～2 節）

(2) 執筆の動機と方法（3 節）

(3) 執筆の目的（4 節）

3. 結論：福音伝達の 5 つのステップ

ルカの福音書の前書きについて学ぶ。

I. 歴史家ルカ（1～2 節）

1. 1～2 節

Luk 1:1 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています。

Luk 1:2 [前節と合節]

(1) ルカは、パウロと同様に、一度も公生涯の間のイエスに会ったことがない。

①ルカは、70 人の弟子のひとりではないかと考える人もいる。

②しかし、その可能性は低い。彼自身は、目撃者ではない。

③ルカは医者である（コロ 4：14）。

Col 4:14 愛する医者 of ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。

④ルカは、信者になる前から知的な人物であった。

- (2) ルカは、古典文学の形式を用いてこの福音書を書いている。
- ①前書き（1～4 節）は、ギリシア語の原文では一つの文である。
 - ②前書きの目的は、著者の資格、調査内容、その作品の信頼性を伝えること。
 - ③ルカは、既存の資料を基に、この福音書を書いたと説明している。
- (3) 「私たちの間で成し遂げられた事柄については、」
- ①「私たち」とは、信者のことである。
 - ②イエスの生涯は隠されたものでなく、多くの人たちが目撃したことである。
- (4) 「初めからの目撃者」
- ①「初めからの目撃者」とは、使徒として召された人たちのことである。
 - *「初め」とは、イエスの公生涯の始まりのことである。
 - *バプテスマのヨハネの奉仕から、イエスの公生涯が始まる。
 - *「目撃者」のギリシア語は、オートプテイスである。
 - *これは医学用語で、解剖するという意味である（autopsy）。
 - ②彼らは、「みことばに仕える者」となった。
 - *「みことば」とは、福音のことである。
 - *「初めからの目撃者」＝「みことばに仕える者」である。
- (5) 「私たちに伝えたとおりのことを」の「私たち」は、狭い範囲の信者である。
- ①彼らは、自分たちが目撃したことを、「私たち」に伝えてくれた。
 - *これらは、そのほとんどが口伝情報である。
- (6) 「多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みています」
- ①「多くの人」とは、幾人かという意味である。
 - *それが誰のことかは、私たちには分からない。
 - ②「書き上げる」（エピケイレオウ）には困難な試みというニュアンスがある。
 - *イエスの公生涯の正確な記録を残すことは、容易なことではない。

II. 執筆の動機と方法（3 節）

1. 3 節

Luk 1:3 私、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。

- (1) 「すべてのことを初めから綿密に調べていますから、」
- ①「初め」とは、イエスの公生涯の序曲となる 2 つの誕生物語である。

＊バプテスマのヨハネの誕生物語とイエスの誕生物語

②ルカはイエスの公生涯を綿密に調べた。

③その際、ルカは 2 種類の資料を用いた。

＊文書化された資料

・マタイの福音書、マルコの福音書、その他の短い資料

・ヨハネの福音書は、まだ書かれていない。

＊口伝の資料

・中には、不正確な情報もあったと思われる。

④ルカは、既存の記録よりもより包括的で信頼できる記録を書こうとした。

＊ルカは、目撃者に直接インタビューを行ったはずである。

＊エリサベツとマリアへのインタビュー内容は、非常に興味深い。

(2) 「順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います」

①ルカは、すでに存在している資料を吟味し、その内容を熟知している。

②取捨選択した資料を順序立てて書き上げる。

③ルカの福音書は、イエスの公生涯の出来事を時間順に記している。

(3) 「尊敬するテオフィロ様」

①テオフィロとは、「神を愛する人」という意味である。

②最初にルカの福音書を受け取り、それを流布させた実在の人物か。

③神を愛するすべての人を指す言葉なのか。

④「尊敬する」（クラティストス）という敬称が付いている。

＊「テオピロ閣下」（口語訳）

⑤テオピロとは、ローマ帝国の高官であったと思われる。

⑥ルカの著作活動を援助した、パトロンである可能性が高い。

⑦使徒の働きも、同じ人物に献呈された（使 1 : 1）

Act 1:1 テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。

III. 執筆の目的（4 節）

1. 4 節

Luk 1:4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていたきたいと思います。

(1) テオフィロが信者であったかどうかは分からない。

①彼は、すでに教えを受けていた。

②メシアの生涯、福音の内容、キリスト教の教理などについての教え

(2) テオフィロがすでに受けた教えが、信頼できるものであることを証明する。

①この文書がローマ帝国内で流布し、信者が多く起こされることを期待する。

(3) 「すでにお受けになった教えが確かであることを、」

①聖書が教える「靈感」とは何か。

*聖霊が、ルカを導き、誤りのない記録を書かせた。

*ルカは、あらゆる人間的な努力を惜しまなかった。

*聖霊は、ルカの性質、経験、能力などもお用いになった。

結論

1. 福音伝達の 5 つのステップ

(1) 信者の間である出来事が実現した（神が歴史に介入された出来事）。

①その意義は、2000 年経っても変わらない。

(2) その出来事のある人たちが伝えた。

①彼らは、目撃者である。

②彼らは、みことばに仕える人々である。

(3) 多くの人たちがまとめて書き上げようと試みている。

①これは困難が伴う試みである。

(4) ルカは、それらの記録や口伝情報を綿密に調査し、順序立てて書いた。

①信頼できない情報は、排除された。

②ルカ独自の調査も行った。

(5) 私たちは、ルカの福音書を通して、メシアの生涯についての情報を得ている。

①信じるとは、事実を事実として受け入れることである。

②救いの確信がないのは、聖書が神のことばであるという確信がないから。

ルカの福音書 02 回

ヨハネ誕生の告知

ルカ 1 : 5～25

1. はじめに

(1) 前は、「献呈の辞」について学んだ。

①ルカは、書かれた文書や流布している口伝情報などを綿密に調査した。

②そして、調査した結果を順序立てて書いた。

③私たちは、それを通してメシアの生涯について信頼できる情報を得ている。

(2) 小説家は、最初の一文をどうするかで悩むと言われている。

①恐らくルカは、さほど悩まなかったと思われる。

②ルカは、この福音書を「ヨハネ誕生の告知」から始めている。

③メシアの公生涯の源流は、メシアの先駆者であるヨハネの誕生である。

④冒頭部分（ルカ 1 : 5～56）の構成は、慎重に計算されたものである。

⑤ルカ 1～2 章は、七十人訳聖書の文体に似ている（ヘブル的リズムがある）。

(3) 「ヨハネの誕生」と「イエスの誕生」の対比

①両親の紹介（ルカ 1 : 5～7、ルカ 1 : 26～27）

②天使の御告げ（ルカ 1 : 8～23、ルカ 1 : 28～30）

③しるし（ルカ 1 : 18～20、ルカ 1 : 34～38）

④妊娠（ルカ 1 : 24～25、ルカ 1 : 42）

2. アウトライン

(1) ヨハネの両親の紹介（5～7 節）

(2) ザカリヤに対する天使の御告げ（8～17 節）

(3) しるし（18～23 節）

(4) エリサベツの妊娠（24～25 節）

3. 結論

(1) 不妊について

(2) 神の摂理について

ヨハネ誕生の告知について学ぶ。

I. ヨハネの両親の紹介（5～7 節）

1. 5～6 節

Luk 1:5 ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組の者でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。

Luk 1:6 二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた。

(1) ルカは歴史家なので、まず時代設定をする。

①ヘロデ大王は、前 37 年～前 4 年の間、ユダヤの王であった。

*彼は、ローマによって任命を受けた傀儡王であった。

*イドマヤ人（エサウの子孫）で、悪名高い王であった。

*「ユダヤ」は、広義の意味でユダヤ人の土地。

*ローマの行政区としては、ユダヤ、サマリヤ、ガリラヤ。

②ヨハネの誕生は、一般の歴史の中に組み込まれた出来事である。

③神は、歴史を導かれるお方、歴史の中に介入されるお方である。

(2) 次に、祭司ザカリヤが紹介される。

①マタイは、「〇〇が成就するためであった」という定型句を多用した。

*マタイは、ユダヤ人向けに福音書を書いた。

②ルカは、定型句ではなく、旧約的雰囲気を通して同じ目的を達成した。

*ルカは、異邦人向けに福音書を書いた。

③ザカリヤは、「主は覚えておられる」という意味である。

④ザカリヤは、レビ族の中のアロンの家系出身である。

⑤ダビデの時代に、祭司はくじによって 24 の組に分けられた。

⑥アビヤの組は 8 番目であった（1 歴 24 : 10）。

1Ch 24:10 第七はハ・コツに、第八はアビヤに、

*アビヤは第 8 組のリーダーの名前である。

⑦各組が、安息日から安息日まで年に 2 回神殿で奉仕をした。

*それ以外に、3 回の巡礼祭での奉仕があった。

⑧捕囚から帰還したのは、4 組だけであったが、それが 24 組に細分化された。

(3) さらに、妻のエリサベツが紹介される。

①エリサベツは、「神の約束」「神の契約」という意味である。

②両者の名前を合体すると「神は約束を覚えておられる」という意味になる。

③彼女もアロンの家系出身である。

④ユダヤ教の伝承では、祭司は祭司の娘と結婚するのがよいとされた。

(4) 二人とも神の前に正しい人であった。

①律法によって義とされていたという意味ではない。

②彼らは信仰によって救われていた。

③旧約時代の信仰表現は、モーセの律法を守ることであった。

④罪を犯したなら、律法が命じるいけにえを献げていた。

2. 7 節

Luk 1:7 しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた。

(1) ユダヤ人は、子がないのは悲劇的なことだと考えていた。

①医者の子は、その原因はエリサベツの不妊にあるとしている。

②当時は、子と与えられないのは女性の責任であるとされていた。

(2) 彼らは、年をとっていたので、子を得る希望はとうの昔になくしていた。

①エリサベツは、この状況を恥としていた（ルカ 1：24～25）。

Luk 1:24 しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。

Luk 1:25 [前節と合節]

II. ザカリヤに対する天使の御告げ（8～17 節）

1. 8～9 節

Luk 1:8 さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、

Luk 1:9 祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。

(1) アビヤの組の祭司たちが当番で、神殿で奉仕をしていた。

①祭司の人数が多かったので、神殿で香をたく役割はくじで決められた。

②当時、約 18,000 人の祭司がいたと言われている。

*ヨセフスによれば、2 万人近い祭司がいた。

③各組に 750 人の祭司がいたことになる。

④くじに当たるのは生涯に一度で、当たらないで奉仕を終える者もいた。

⑤この日、そのくじがザカリヤに当たった。

⑥ザカリヤにとっては、生涯で最良の日となった。

⑦大祭司でない一般の祭司が、至聖所に最も近づける機会が来た。

*至聖所にはシャカイナグローリーはなかった。

3. 10～12 節

Luk 1:10 彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた。

Luk 1:11 すると、主の使いが彼に現れて、香の祭壇の右に立った。

Luk 1:12 これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われた。

(1) 聖所の中でたく香は、イスラエルの民全体の祈りの象徴である。

- ①これは、午後 3 時にたく香であろう。
- ②この瞬間、ザカリヤはイスラエル全体の注目の的となった。
- ③ザカリヤは、イスラエルの民の祈りを神に届ける器となった。
- ④外で祈っているのは、そのほとんどがエルサレムの住民である。
- ⑤男子はイスラエルの庭で、女子は婦人の庭で祈っていた。

(2) 香の祭壇は、聖所の中央に置かれ、至聖所に向かっていた。

- ①天使が香の祭壇の右に立った。
- ②ユダヤ教の伝承の中で、裁きの天使は香壇の右に立つと言われていた。
- ③旧約聖書では、天使を見た者が恐れを感じるのはよくあることである。
- ④ザカリヤも天使を見て恐れた。

4. 13～14 節

Luk 1:13 御使いは彼に言った。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。

Luk 1:14 その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。

(1) 天使の御告げの内容

- ①恐れることはない。
- ②ザカリヤの祈りは聞き入れられた。
 - *ザカリヤは祈っていた。
 - *息子が与えられるように、あるいは、メシアが到来するように。
 - *息子の誕生は、その祈りに対する答えである。
- ③老年の妻エリサベツが、男の子を産む。
- ④その名をヨハネとつけなさい。
 - *ヨハネとは、「ヤハウエの恵み」という意味である。
 - *主の主権を表わしている。
- ⑤その子は、両親に喜びをもたらすだけでなく、多くの人に喜びをもたらす。

5. 15～17 節

Luk 1:15 その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、

Luk 1:16 イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせます。

Luk 1:17 彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」

(1) その子は主の御前で大いなる者となる。

①いろいろな種類の大きいなる者がいる。

＊人間の評価による大いなる者

＊自己評価による大いなる者

②実際のところ、主の目に大いなる者であれば、他のことはどうでもよい。

(2) その子の偉大さが、4 種類列挙される。

①彼は、主のために選び分けられたナジル人である。

＊ぶどうの実から取ったものを飲まない。

②彼は、胎内にいるときから、メシアの先駆者として聖霊に満たされている。

③彼は、イスラエル人の多くを神である主に立ち返らせる。

④彼は、預言者エリヤが行った奉仕を行うようになる。

＊人々を、悔い改めを通して主に立ち返るようにする。

＊ここでは、イエスの神性が啓示されている。

Ⅲ. しるし (18～23 節)

1. 18 節

Luk 1:18 ザカリヤは御使いに言った。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

(1) ザカリヤは、アブラハムと同じ反応を示した。

①創 15 : 8 (土地の約束)

Gen 15:8 アブラムは言った。「【神】、主よ。私がそれを所有することが、何によって分かるでしょうか。」

(2) ザカリヤは、「何によって知ることができるでしょうか」と言った。

①彼は、しるしを求めたのである。

②その結果、9 ヶ月にわたり不便な生活を送ることになる。

③天使は、ザカリヤを叱責する。

2. 19～20 節

Luk 1:19 御使いは彼に答えた。「この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。」

Luk 1:20 見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

(1) 天使は自己紹介をした。

①自分は、神の前に立つガブリエルである。

*一般の天使の中で、ガブリエルとミカエルのみ名前が知られている。

②この良い知らせは、神からのものである。

③ガブリエルは、2 度ダニエルに現れた（ダニ 8：16、9：21）。

*2 回とも、ダニエルの理解を助けるためであった。

*同じ目的を持って、ザカリヤにも現れた。

*しかし、ザカリヤは信じようとしなかった。

(2) ザカリヤは不信仰に対する罰を受けた。

①口がきけなくなるのは、不信仰に対する裁きである。

*耳が聞こえなくなった可能性もある。

②と同時に、これは「しるし」でもある。

*この時から 9 ヶ月間、ガブリエルの言葉が効力を発揮した。

*信仰が戻るまでは、証しも賛美も彼の口からは出て来なくなった。

3. 21～22 節

Luk 1:21 民はザカリヤを待っていたが、神殿で手間取っているのも、不思議に思っていた。

Luk 1:22 やがて彼は出て来たが、彼らに話をする事ができなかった。それで、彼が神殿で幻を見たことが分かった。ザカリヤは彼らに合図をするだけで、口がきけないままであった。

(1) 外でザカリヤを待つ民は、時間がかかっているのも不思議に思っていた。

①香をたくのにさほどの時間はかからないので、祭司はすぐに出て来る。

③人々は、ザカリヤは冒瀆の罪で打たれたのではないかと考えた。

④もしそうなら、彼らの祈りは神に届かないことになる。

(2) ようやく出て来たが、ザカリヤは話をする事ができなかった。

①通常は、祭司はアロンの祝福の祈り（民 6：24～26）を献げる。

②しかしザカリヤは、合図をするだけで口がきけないままであった。

③人々は、ザカリヤが神殿で幻を見たことを理解した。

4. 23 節

Luk 1:23 やがて務めの期間が終わり、彼は自分の家に帰った。

(1) 当番の務めが終わったので、自分の家に帰った。

①彼の家は、ユダの山地にあった。

＊現在のエン・カレムという町

＊本来は人々のささげ物で生活が支えられるべきである。

＊困窮する人が多かったので、貧しい祭司は自らも労働した。

②彼は、口がきけないままであった。これは、「しるし」である。

IV. エリサベツの妊娠（24～25 節）

1. 24～25 節

Luk 1:24 しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。

Luk 1:25 [前節と合節]

(1) エリサベツは、天使の御告げの通りに妊娠した。

①彼女の喜びの叫びは、ラケルの叫びに似ている（創 30 : 23）。

Gen 30:23 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。

(2) 彼女は、五か月の間、自発的に安静にしていた。

① 高齢出産のため

②大騒ぎする人々を避けるため

③天使の御告げは、夫婦の秘密にしたと思われる。

④天使の御告げについて最初に聞かされたのは、マリアであろう。

⑤ルカ 1 : 36

Luk 1:36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。

結論

1. 不妊について

(1) 不妊は、2つの意味で不幸なことであった。

①経済的理由：子どもがいないと、経済的に困窮する。

②社会的理由：聖書では、不妊が神の裁きとして語られることがある。

③しかし、このことがすべての不妊に当てはまるわけではない。

(2) ルカ 1 : 6

Luk 1:6 二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた。

①エリサベツの不妊の理由は、彼女の罪ではない。

②ユダヤ人の読者は、直ちにアブラハムとサラを思い出したはずである。

(3) 「落ち度なく行っていた」は、ギリシア語で「アメンプトス」である。

①ヘブル語では「タム」である。

②創 6 : 9

Gen 6:9 これはノアの歴史である。／ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

③ヨブ 1 : 8

Job 1:8 【主】はサタンに言われた。「おまえは、わたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もない。」

(4) 神は不妊の女を通して栄光を表された。

①アブラハムとサラ

②イサクとリベカ

③ヤコブとラケル

④サムソンの両親（マノアと無名の妻）

⑤サムエルの両親（エルカナとハンナ）

⑥ザカリヤとエリサベツ

(5) 神は、より大きな祝福を与えるために、何かを取り去られることがある。

①忍耐して待てば、素晴らしいものが与えられる。

2. 神の摂理について

(1) エス 3 : 7

Est 3:7 クセルクセス王の第十二年の第一の月、すなわちニサンの月に、日と月を決めるためにハマンの前で、プル、すなわちくじが投げられた。くじは第十二の月、すなわちアダルの月に当たった。

①ハマンは、ユダヤ人抹殺の日時を決定するためにくじを引いた。

*くじは、「プル」（複数形はプリム）である。

*ハマンの悪意が表現されている。

②くじは、第 12 の月（アダルの月）に当たった。

③ユダヤ人たちに、約 1 年間の準備期間が与えられた。

(2) 箴 16 : 33

Pro 16:33 くじは膝に投げられるが、／そのすべての決定は【主】から来る。

(3) ルカ 1 : 9

Luk 1:9 祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。

①ヨハネの誕生も、イエスの誕生も、神の御手の中に置かれている。

ルカの福音書 03 回

イエス誕生の告知

ルカ 1：26～38

1. はじめに

(1) 前は、「ヨハネ誕生の告知」について学んだ。

①冒頭部分（ルカ 1：5～56）の構成は、慎重に計算されたものである。

②ルカ 1～2 章は、七十人訳聖書の文体に似ている（ヘブル的リズムがある）。

(2) 「ヨハネの誕生」と「イエスの誕生」の対比

①両親の紹介（ルカ 1：5～7、ルカ 1：26～27）

②天使の御告げ（ルカ 1：8～23、ルカ 1：28～30）

③しるし（ルカ 1：18～20、ルカ 1：34～38）

④妊娠（ルカ 1：24～25、ルカ 1：42）

(3) 乙女マリアの単純な信仰と、年老いた祭司ザカリヤの慎重な信仰の対比

①恐らくルカは、マリアかその家族にインタビューしたのであろう。

②今で言うところの「個人情報」を引き出したのであろう。

2. アウトライン

(1) イエスの両親の紹介（26～27 節）

(2) マリアに対する天使の御告げ（28～33 節）

(3) しるし（34～37 節）

(4) マリアの妊娠（38 節）

3. 結論

(1) マリアの信仰

(2) マリアの限界

イエス誕生の告知について学ぶ。

I. イエスの両親の紹介（26～27 節）

1. 26 節

Luk 1:26 さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。

(1) エリサベツが妊娠 6 ヶ月に入った時

①これもまた、2 つの告知物語を関連させる言葉である。

- ②再びガブリエルが登場する。
- ③神が主導権を握っておられる。

(2) ガリラヤのナザレという町

- ①ルカは、イスラエルの地の外に住む人たちのために、これを書いている。
- ②ヨハネ誕生の告知の舞台は、エルサレムの神殿であり、ユダの山地であった。
- ③今回の舞台は田舎の村ナザレである。
 - *ナザレは、旧約聖書にもタルムードにも登場しない。
- ④ヨハネの物語は、神殿から始まり、外に広がって行く。
- ⑤イエスの物語は、辺境の地から始まり、神殿に向って行く。
- ⑥当時のナザレの人口は、1,600～2,000 人程度であった。
- ⑦これは村であるが、ルカは評価を高めるために町（ポリス）と呼んでいる。

2. 27 節

Luk 1:27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアと
いた。

(1) 処女のマリアは、年老いたザカリヤとエリサベツ夫婦と対比されている。

- ①マリアはヘブル語でミリアム。
 - *「高く上げられた者」という意味である。
 - *モーセの姉はミリアムであった。
- ②処女は「パーセノス」。若い未婚の女性。処女性を含意している。
- ③当時の女性の婚約年齢はおよそ 13 歳（12 歳の可能性もある）。

(2) 当時のユダヤ人の結婚の習慣

- ①花婿の父親が嫁を探すところから始まる（息子の意見は、多少反映される）。
- ②良い娘がいたら、その父親に申し込みをする（娘の意見は無視される）。
- ③正式な合意があれば、父親が花嫁の父親に花嫁料を払う。
- ④花婿が同意書を出し、正式な「いいなずけ」関係が成立する。
- ⑤結婚生活は 1 年ほど先のことになるが、法的には結婚関係とみなされる。
- ⑥もし花嫁が他の男と関係を持てば、姦淫の罪を犯したことになる。
- ⑦婚約関係の破棄は、離婚によってのみ可能になる。

(3) ダビデの家系のヨセフという人が、いいなずけであった。

- ①「いいなずけ」の関係は、今日の婚約関係以上に法的拘束力があつた。
- ②マタイの福音書の系図では、ヨセフはダビデの家系であるとされている。
- ③ルカの福音書の系図（3 章）によれば、マリアもダビデの家系である。

- ④メシアは、ダビデの子孫として誕生する。
- ⑤義父との法的関係のゆえに、イエスにはダビデの王位を継承する資格あり。

II. マリアに対する天使の御告げ（28～33 節）

1. 28 節

Luk 1:28 御使いは入って来ると、マリアに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

- (1) 天使ガブリエルが再び登場する。
 - ①ザカリヤの場合よりも、記述が単純である。
- (2) 「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」
 - ①天使はマリアを礼拝しているのではなく、彼女に挨拶しただけである。
 - ②「おめでとう」は、シャロームであろう。普通の挨拶の言葉である。
 - ③次に続く言葉は尋常ではない（仮にマリアに社会的地位があったとしても）。
 - * 「恵まれた方」という呼びかけ（英語で「highly favored one」）
 - ・これは、「恵みに満ちた方」という意味ではない。
 - * 「主があなたとともにおられます」という約束
 - ・マリアが選ばれたのは、100 パーセント神の恵みによる。

2. 29～30 節

Luk 1:29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。

Luk 1:30 すると、御使いは彼女に言った。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。」

- (1) マリアの反応
 - ①ザカリヤの場合は、「取り乱し、恐怖に襲われた」（12 節）とあった。
 - ②マリアの場合は、「ひどく戸惑って、…考え込んだ」とある。
 - ③ユダヤのユダヤ人たちは、ガリラヤ人を軽蔑していた。
 - * ガリラヤ訛りが強くて、無学である。
 - ④「恵まれた方」とは、神から恵みを与えられた方という意味である。
- (2) ザカリヤへの告知とマリアへの告知の違い
 - ①ともに、「恐れることはありません」で始まる。
 - ②ザカリヤの場合は、願いが聞かれたという言葉が続く。
 - ③マリアの場合は、「あなたは神から恵みを受けたのです」となる。
 - ④彼女は、ユダヤ人たちが長く待ち望んでいたメシアの母となる特権を得た。

3. 31～33 節

Luk 1:31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。

Luk 1:32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

Luk 1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

(1) メシアは、人間性を持って誕生する。

①ガブリエルは、イザ 7：14 をほぼそのまま引用している。

Isa 7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

(2) メシアは、人類を救う神である。

①マリアにはイエスという名が示された。

②イエスは、「イエシュア」（主は救い）である。

③ユダヤ人伝道では「イエス (Jesus)」より「イエシュア (Yeshua)」使用。

(3) 「大いなる者となり」

①ヨハネの場合は、「主の御前に大いなる者となる」（15 節）であった。

②ここでは、イエスの優位性が示されている。

(4) 「いと高き方の子と呼ばれます」

①ヘブル語で「いと高き方」は、「ハ・エルヨン」（神の御名）である。

②ヘブル的には、子とは父と同等である（子は父のコピーである）。

③この称号は、イエスの神性を示している。

(5) 「彼にその父ダビデの王位をお与えになります」

①これは、2 サム 7：12～17 にあるダビデ契約の成就の約束である。

②これは、イエスがユダヤ人のメシアとして来られたことを示している。

(6) 「彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません」

①ヤコブの家とは、イスラエルの民である。

②これもまた、イエスがユダヤ人のメシアであることを示している。

③この約束は、イエスの再臨と千年王国の出現によって成就する。

Ⅲ. しるし (34～37 節)

1. 34 節

Luk 1:34 マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」

(1) ザカリヤとマリアの違い

①ザカリヤの場合は、不信仰の言葉を語った。

*自分は年寄りだし、妻もそうだ。

②マリアの場合は、どうしたらそれが実現するのかを尋ねている。

*「男の人を知りませんのに」

*知るとは、体験すること。婉曲語である。

*マリアは、ヨセフと実質的な結婚生活に入っていない。

*ヨハネの誕生は奇跡的なことであるが、イエスの誕生はそれ以上。

③ザカリヤへの告知とマリアへの告知は、ここで大きく道が分かれる。

2. 35 節

Luk 1:35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

(1) ヘブル的対句法がある。

①「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます」

*ユダヤの伝統では、神の臨在を「おおう」という動詞で表現する。

*異教の神話にあるような、神と人との結婚ではない。

*医者 of ルカは、これ以上詳しくは論じていない。

②「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます」

*ここに受肉の神秘が表現されている。

*イエスは、神性をなくすことなく、人間として誕生する。

(2) 「おおう」という動詞は、「エписキアゾウ」である。

①変貌山でシャカイナグローリーがそこにいた弟子たちをおおった。

②マタ 17:5、マコ 9:7、ルカ 9:34

Mat 17:5 彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲が彼らをおおった。すると見よ、雲の中から「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け」という声がした。

3. 36～37 節

Luk 1:36 見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です。

Luk 1:37 神にとって不可能なことは何もありません。」

(1) マリアに「しるし」が与えられた。

- ①彼女は「しるし」を求めたわけではない。
- ②この「しるし」には、叱責の意味はない。
- ③親戚のエリサベツの妊娠が、「しるし」である。
- ④ザカリヤとエリサベツの「個人情報」が開示された。

(2) マリアに最高の保障が与えられた。

- ①「神にとって不可能なことはありません」
- ②エリサベツの妊娠以外にも、先例がある。
- ③創 18 : 14

Gen 18:14 【主】にとって不可能なことがあるだろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子が生まれている。」

- ④ルカ 1 : 37 は、試練の中にいる人を励ましてきた。
- ⑤さらに、処女降誕が信じられない人に勇気を与えてきた。

IV. マリアの妊娠 (38 節)

1. 38 節

Luk 1:38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

(1) 「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」

- ①マリアは、旧約聖書でよく使用されていた用語を用いて応答した。
- ②1 サム 1 : 18 (サムエルの母ハンナ)

1Sa 1:18 彼女は、「はしめが、あなたのご好意を受けられますように」と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようなではなかった。

- ③少女マリアの信仰は、信者の模範である。
- ④天使の御告げは、グッドニュースであると同時に、バッドニュースであった。
- ⑤彼女は、払うべき犠牲の大きさを知りながら、単純に従った。

(2) 天使は、その使命を終えた。

- ①次にマリアが登場するときには、彼女は妊娠している。
- ②ルカ 1 : 42 (エリサベツの言葉)

Luk 1:42 そして大声で叫んだ。「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」

結論

1. マリアの信仰

(1) ルターの解説

①イエスの誕生物語には、3つの奇跡が含まれている。

＊神が人となられたこと

＊処女が妊娠したこと

＊マリアが信じたこと

②この中で最も偉大なのは、3番目である。

(2) マリアは、イエスの母になるという召命に応答したのである。

(3) ここには普遍的適用がある。

①私は、説教者として召命を受けた。

②職業は、神からの召命である。これが職業倫理の土台である。

③私たちは、男性として、女性として召されている。

④父、母、夫、妻、子どもとして召されている。

⑤神に不可能はないと信じるなら、神は人間の限界を超えて用いてくださる。

2. マリアの限界

(1) マリア崇拝は、聖書の教えから逸脱している。

(2) アヴェ・マリアの祈り（©日本カトリック司教協議会）

アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、

主はあなたとともにおられます。

あなたは女のうちに祝福され、

ご胎内の御子イエスも祝福されています。

神の母聖マリア、

わたしたち罪びとのために、

今も、死を迎える時も、お祈りください。

アーメン。

（2011 年 6 月 14 日 定例司教総会にて承認）

(3) ヨハ 2：3～5

Joh 2:3 ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。

Joh 2:4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」

Joh 2:5 母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。」

(4) 使 1：14

Act 1:14 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。

ルカの福音書 04 回
マリアのエリサベツ訪問
ルカ 1 : 39～45

1. はじめに

(1) 前は、「イエス誕生の告知」について学んだ。

①マリアにしるしが与えられた。

②親類のエリサベツは、妊娠 6 ヶ月になっている。

③ルカ 1 : 38

Luk 1:38 マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしめです。どうぞ、あなたのお
ことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。

④ルカ 1 : 39

Luk 1:39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。

⑤マリアの妊娠は、38 節と 39 節の間に起こった。

⑥そのマリアが、エリサベツに会いに行く。

⑦二人の無名の女性の出会いによって、人類救済の歴史が大きく動く。

⑧小さな始まりを決して軽視してはならない。

2. アウトライン

(1) マリアのあいさつ (39～42 節 a)

(2) エリサベツの応答 (42b～45 節)

3. 結論

(1) 神の母

(2) 聖霊の満ちし

マリアのエリサベツ訪問について学ぶ。

I. マリアのあいさつ (39～42 節 a)

1. 39～40 節

Luk 1:39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。

Luk 1:40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツに会いにいった。

(1) マリアに与えられた「しるし」は、エリサベツの妊娠であった。

①マリアは、急いでユダの山地の町に住むエリサベツを訪問した。

*ザカリヤとエリサベツは、「山地にあるユダの町」に住んでいた。

*紀元 6 世紀以降、この町はエン・カレムと特定されている。

②ナザレからは、徒歩で 4 日前後かかる（距離は約 160 キロ）。

- ③街道に強盗が出没したので、ひとり旅は非常に危険である。
- ④同行者がいたか、キャラバン隊を見つけたかのいずれかであろう。
- ⑤でなければ、家族はこの旅を許可しないはずである。

(ILL) 聖地旅行でのエン・カレム訪問

(2) 訪問の理由は書かれていないが、推測することはできる。

- ①ナザレから一時的に逃れるため
- ②不安定な時期を平安に過ごすため
- ③天使から聞いた「しるし」を確認するため
- ④親戚のエリサベツから、慰めと励ましを受けるため

(3) マリアは、ザカリヤの家に言って、エリサベツにあいさつをした。

- ①ザカリヤは、依然として耳が聞こえず、口もきけなかった。
 - * 不信仰へのさばきの期間が続いていた。
- ②エリサベツは、少なくとも妊娠 6 ヶ月目に入っていた。
- ③「あいさつ」とは、平安を祈る言葉である。「シャローム」
- ④その時、超自然的なことが 2 つ起こった。

2. 41～42 節 a

Luk 1:41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。

Luk 1:42a そして大声で叫んだ。

(1) 子が胎内で躍った。

- ①躍るとは、喜びの表現である。
- ②ヨハネは、母の胎にあるときからメシアの先駆者としての奉仕をしている。
- ③ルカ 1 : 15

Luk 1:15 その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、

- ④すでにマリアの胎内に子が宿っているのが分かる。
- ⑤ヨハネは、マリアの胎内に宿るイエスについて証言したのである。

(2) エリサベツは、聖霊に満たされ、大声を上げた。

- ①胎児とその母は、イエスがメシアであることを認識する最初の人となった。
- ②彼女は、聖霊に満たされ、大声を上げた。
 - * 満たされるとは、聖霊の支配のことである。
 - * 大声で語るとは、預言的言葉を語ることである。

II. エリサベツの預言的言葉（42b～45 節）

1. 42 節 b

Luk 1:42b 「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

(1) エリサベツの叫びは、ヘブル的対句法で記されている。

① マリアの賛歌もまた、非常にヘブル的である。

② 「女の中で最も祝福された方」

＊ヘブル的には、「非常に祝福されている」という意味である。

＊当時は、女性の偉大さは、どのような子を産んだかによって決まった。

③ 「胎の実も祝福されている」ので、「女の中で最も祝福された方」である。

＊マリアは、メシアを宿す特権に与った。

2. 43 節

Luk 1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。

(1) 焦点はマリアではなく、胎内の子に合わせられている。

① マリアは、彼女自身の偉大さではなく、胎内の子のゆえに尊い存在である。

(2) 「私の主の母」

① エリサベツはマリアの胎内に宿っている子を「私の主」と認識した。

＊エリサベツは、天使ガブリエルが伝えた内容を完全に理解していた。

② イエスは主であるという認識が広がるのは、聖霊降臨以降のことである。

③ 使 2 : 36

Act 2:36 ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

(3) マリアは「主の母」である。

① エリサベツは、妬み心から言っているのではない。

② 彼女には、マリアの胎内に宿る子が自分の救い主であるという喜びがある。

③ エリサベツは、自分は「主の母」の訪問を受けるに値しないと考えた。

④ ここでは、バプテスマのヨハネに対するイエスの優位性が表現されている。

(4) 主とは、「キュリオス」である。

① ユダヤ人には、「メシア」という言葉の方がより重要である。

＊ユダヤ人たちは、メシアの到来を待ち望んでいた。

② しかし、ギリシア人には「キュリオス」という言葉の方が重要である。

＊異邦人たちは、カイザルのことを「キュリオス」と呼んでいた。

- ③七十人訳聖書では、ヤハウエというヘブル語がキュリオスと訳されている。
- ④共観福音書では、「キュリオス」は 166 回出て来る（95 回がルカ）。
- ⑤ルカは、イエスを指す言葉として「キュリオス」を用いた。

4. 44～45 節

Luk 1:44 あなたのあいさつの声が私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました。

Luk 1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」

(1) エリサベツの子は、胎児の時からメシアの先駆者として働いている。

①その子は、喜んで使命を果たしている。「喜んで躍りました」

②成人したヨハネが語る言葉（ヨハ 3：29）

Joh 3:29 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。

(2) マリアは「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人」である。

①それゆえマリアは、幸いである。

②ザカリヤとの比較（ルカ 1：20）

Luk 1:20 見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

③マリアは、疑いを抱きながらエリサベツを訪問したのではない。

④彼女は、天使が告げた内容は必ず実現すると信じた。

⑤そしてエリサベツは、マリアの信仰を賞賛した。

結論

1. 神の母

(1) カトリック教会は、マリアを「神の母聖マリア」と呼ぶ。

①確かに、マリアはイエスの母である。

②また、イエスは人間性と同時に神性を持っている。

③だからと言って、マリアが「神の母」であるとは言えない。

(2) 聖書には、「神の母」という言葉は出て来ない。

①神に母があると考えるのは、教理的に問題である。

②神は永遠の存在である。

③しかしマリアは、母の胎に宿った時から存在し始めた。

④神がマリアから誕生したような印象を与える言葉は、危険である。

⑤マリアは、イエスの受肉という出来事において用いられた器に過ぎない。

⑥それ以上にマリアを崇めることは、非聖書的である。

2. 聖霊の満たし

(1) 聖霊の満たしとは、聖霊の支配下に置かれることである。

- ①ペンテコステ以前は、信者は特定の目的のために聖霊の支配を受けた。
- ②ペンテコステ以降は、信者の内に聖霊が継続して住まわれるようになった。
- ③エリサベツは、聖霊の導きによって預言的言葉を語った。

(2) ルカ 1 章で、3 人の人物が聖霊に満たされている。

①バプテスマのヨハネ（1：15）

Luk 1:15 その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、

②エリサベツ（1：41）

Luk 1:41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。

③ザカリヤ（1：67）

Luk 1:67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。

(3) ルカ 1 章と 2 章で、5 つの賛歌が登場する。

①エリサベツの預言的言葉（1：42～45）

②マリアの賛歌（マグニフィカート）（1：46～55）

③ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）（1：68～79）

④天使たちの賛歌（グロリア・イン・エクセルシス・デオ）（2：14）

⑤シメオンの賛歌（ヌンク・ディミティス）（2：29～30）

(4) エペ 5：18

Eph 5:18 また、ぶどう酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。

ルカの福音書 05 回

マリアの賛歌

ルカ 1 : 46～56

1. はじめに

(1) 前は、「マリアのエリサベツ訪問」について学んだ。

①マリアの妊娠は、38 節と 39 節の間に起こった（受胎告知と訪問の間）。

②マリアは、妊娠 6 ヶ月目のエリサベツに会いに行った。

③二人の女性の出会いによって、人類救済の歴史が大きく動いた。

④一連の出来事を導いておられる神を賛美するのは、自然な流れである。

(2) マリアの賛歌は、ラテン語で「マグニフィカート」と呼ばれる。

①ラテン語訳聖書の最初の言葉「あがめる」から出ている。

②ほぼ全部が、旧約聖書へのさりげない言及や旧約聖書からの引用である。

*少なくとも、12 箇所がそうである（Alfred Plummer）。

③ザカリヤの賛歌（1 : 68～79）とシメオンの賛歌（2 : 29～32）も同じ。

④マリアの賛歌は、即興の歌ではないと思われる。

*完成度の高さとマリアの思索的性質

*ルカ 1 : 29

Luk 1:29 しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと
考え込んだ。

*ルカ 2 : 51

Luk 2:51 それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこ
れらのことをみな、心に留めておいた。

⑤マリアは時間をかけて推敲し、それをエリサベツと分かち合ったのだろう。

⑥この賛歌は、4 連（スタンザ）から構成されている。

2. アウトライン

(1) 第 1 連：自分が受けた祝福（46～48 節）

(2) 第 2 連：神のご性質（49～50 節）

(3) 第 3 連：地位の逆転（51～53 節）

(4) 第 4 連：イスラエルに対するあわれみ（54～55 節）

(5) ナザレへの帰還（56 節）

3. 結論：メシアがもたらす地位の逆転

マリアの賛歌について学ぶ。

I. 第 1 連：自分が受けた祝福（46～48 節）

1. 46～47 節

Luk 1:46 マリアは言った。／「私のたましいは主をあがめ、

Luk 1:47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。

(1) マリアの賛歌は、ハンナの祈りに似ている（1 サム 2：1～10）。

①ハンナは不妊の女であったが、【主】に願って息子サムエルを得た。

②サムエルとは、「神は聞いてくださった」という意味である。

③ハンナの祈り（1 サム 2：1～3）

1Sa 2:1 ハンナは祈った。／「私の心は【主】にあって大いに喜び、／私の角は【主】によって高く上がります。／私の口は敵に向かって大きく開きます。／私があなたの救いを喜ぶからです。

1Sa 2:2 【主】のように聖なる方はいません。／まことに、あなたのほかにはだれもいないのです。／私たちの神のような岩はありません。

1Sa 2:3 おごり高ぶって、／多くのことを語ってはなりません。／横柄なことばを口にしておはなりません。／まことに【主】は、すべてを知る神。／そのみわざは測り知れません。

＊自分が受けた祝福

＊神のご性質

＊地位の逆転

(2) 子を宿さない処女が妊娠したことの中に、ハンナの妊娠との関連性がある。

①マリアの旧約聖書に関する知識の深さに注目すべきである。

②彼女は、聖書を学び、主と主のみことばを愛するようになっていた。

(3) マリアは、ヘブラ的対句法を用いている。

①「私のたましい」と「私の霊」は、ともに「私」という意味である。

②「主」と「救い主なる神」は、同じ意味である。

③旧約聖書の「ヤハウエ」は、新約聖書の「キュリオス」である。

2. 48 節

Luk 1:48 この卑しいはしために／目を留めてくださったからです。／ご覧ください。今から後、どの時代の人々も／私を幸いな者と呼ぶでしょう。

(1) マリアが主をたたえている理由

①根底に、自分は取るに足りない者であるとの自己認識がある。

＊彼女は、自分は罪人であるとの認識を持っていた。

＊救い主が必要なのは、罪人だけである。

②メシアを胎内に宿したのは、100%神の恵みによるとの認識がある。

＊彼女は、無名の大工のいいなずけに過ぎない。

③神の恵みを受けた自分は、幸いな者だという認識がある。

＊マリアは、低きにいた者が高きに上げられる経験をした。

II. 第2連：神のご性質（49～50 節）

1. 49～50 節

Luk 1:49 力ある方が、／私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるものの、

Luk 1:50 主のあわれみは、代々にわたって／主を恐れる者に及びます。

(1) 「大きなこと」とは、単に処女懐胎のことを指しているだけではない。

①メシア到来の出来事（救済の歴史）に参加させていただきということ。

②マリアは、イスラエルの残れる者のひとりとして認められたのである。

(2) 「その御名は聖なるもの」とは、「主は聖いお方である」という意味。

②「聖い」とは、被造世界を超越したお方であることを示している。

(3) 「主のあわれみは、代々にわたって／主を恐れる者に及びます」

①この言葉の背景に、詩篇 103 篇がある。

Psa 103:15 人 その一生は草のよう。／人は咲く。野の花のように。

Psa 103:16 風がそこを過ぎると それはもはやない。／その場所さえも それを知らない。

Psa 103:17 しかし 【主】の恵みは とこしえからとこしえまで／主を恐れる者の上にあり／主の義は その子らの子たちに及ぶ。

②マリアの賛歌は、ヘブル的であり、旧約聖書からの引用が含まれている。

③「あわれみ」や「恵み」は、契約に対する忠実さを意味している。

III. 第3連：地位の逆転（51～53 節）

1. 51～53 節

Luk 1:51 主はその御腕で力強いわざを行い、／心の思いの高ぶる者を追い散らされました。

Luk 1:52 権力のある者を王位から引き降ろし、／低い者を高く引き上げられました。

Luk 1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、／富む者を何も持たせずに追い返されました。

(1) イスラエルは、主のあわれみによって守られて来た。

①主は、イスラエルの民に示されたあわれみを、マリアにも示された。

(2) 第 3 連は、イエスの御業の預言となっている。

①ヘブル語の未来完了形で理解する必要がある。

(3) イエスは、地位の逆転をもたらされる。

①心の思いの高ぶっている者、権力ある者、富む者は、辱めを受ける。

*52 節は、確立している政治権力の崩壊を預言している。

②低い者、飢えた者は、祝福を受ける。

③マリアはすでにそれを体験したが、これがイスラエルの民の体験となる。

④また、人類全体の体験ともなる。

⑤この逆転劇は、メシア的王国の到来によって成就する。

*マリアは、宇宙大のスケールでこの逆転が起こることを預言している。

IV. 第 4 連：イスラエルへの約束（54～55 節）

1. 54～55 節

Luk 1:54 主はあわれみを忘れずに、／そのしもベイスラエルを助けてくださいました。

Luk 1:55 私たちの父祖たちに語られたとおり、／アブラハムとその子孫に対するあわれみを／いつまでも忘れずに。」

(1) マリアは、イエスの御業をアブラハム契約の成就と見ている。

「主はあわれみを忘れずに、」とは、契約に対する忠実さである。

(2) 神は、アブラハムと契約を結ばれた。

①出 2：24

Exo 2:24 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。

②詩 105：8～10

Psa 105:8 主はご自分の契約を とこしえに覚えておられる。／命じられたみことばを千代までも。

Psa 105:9 それはアブラハムと結んだ契約／イサクへの誓い。

Psa 105:10 主はそれを ヤコブへの定めとして立てられた。／イスラエルへの 永遠の契約として。

③メシアの誕生は、アブラハムとその子孫に与えられた約束の成就である。

V. ナザレへの帰還（56 節）

1. 56 節

Luk 1:56 マリアは、三か月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。

(1) マリアは、ヨハネの誕生を見届けてから帰宅した。

- ①6 ヶ月+3 ヶ月=9 ヶ月
- ②自らの妊娠を確認する意味もあったと思われる。
- ③安定期に入ってから移動したのであろう。

(2) 訳文の比較

- ①「家に帰った」（新改訳 2017）（口語訳）
- ②「自分の家に帰った」（新共同訳）
- ③「己が家に帰れり」（文語訳）
- ④彼女は、まだヨセフと同居していない。つまり、処女のままである。

(3) 故郷の町で、彼女は疑いの目をもって見られたことであろう。

- ①しかし神は、彼女の魂を守られた。
- ②ヨセフとの信頼関係も、神の介入によって維持された。

結論：メシアがもたらす地位の逆転

(1) この賛歌の中心は、地位の逆転である。

- ①高慢な者は低くされ、自らの貧しさを認識する者は高くされる。

(2) マリアは、地位の逆転を体験した。

- ①マリアの賛歌は、神のご性質を歌っている。
- ②ルカの意図は何か。
 - ①この福音書の冒頭で、神のご性質を紹介した。
 - ②これ以降の物語は、神のご性質に基づいて展開していく。

(3) イエスの公生涯は、地位の逆転をもたらした。

- ①山上の垂訓のことば
- ②5000 人のパンの奇跡
- ③ザアカイの救い（ルカ 19：9～10）

Luk 19:9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」

Luk 19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

- ④イエスの死と復活（使 2：36）

Act 2:36 ですから、イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

(4) イエスの再臨とメシア的王国の成就

- ①イザ 2：1～4

Isa 2:1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見たことば。

Isa 2:2 終わりの日に、／【主】の家の山は山々の頂に堅く立ち、／もろもろの丘より高くそびえ立つ。／そこにすべての国々が流れて来る。

Isa 2:3 多くの民族が来て言う。／「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。／主はご自分の道を私たちに教えてくださる。／私たちはその道筋を進もう。」／それは、シオンからみおしえが、／エルサレムから【主】のことばが出るからだ。

Isa 2:4 主は国々の間をさばき、／多くの民族に判決を下す。／彼らはその剣を鋤に、／その槍を鎌に打ち直す。／国は国に向かって剣を上げず、／もう戦うことを学ばない。

ルカの福音書 06 回

ヨハネの誕生

ルカ 1 : 57～66

1. はじめに

- (1) 前は、「マリアの賛歌」について学んだ。
- (2) 文脈としては、ヨハネとイエスの対比が続いている。
 - ①誕生の告知
 - ②実際の誕生物語
 - ③人々の喜び
- (3) この対比によって、ヨハネよりもイエスのほうが偉大であることが示される。
- (4) ヨハネが誕生する。
 - ①赤子の誕生を祝うために、私たちがザカリヤの家に行こうではないか。

2. アウトライン

- (1) 赤子の出産 (57～58 節)
- (2) 割礼と命名 (59～64 節)
- (3) 人々の反応 (65～66 節)

3. 結論：ザカリヤの信仰から学ぶ。

ヨハネの誕生について学ぶ。

I. 赤子の出産 (57～58 節)

1. 57 節

Luk 1:57 さて、月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

- (1) ヨハネの誕生物語の中には、奇跡的な要素が何もない。
 - ①当時流布していたユダヤ人の聖人伝とは本質的に異なる。
 - ②特に、ノアとモーセの誕生物語とは異なる。
 - *誕生時に部屋が明るく輝いた。
 - *赤子のノアがしゃべり出した。
 - ③これは、短くて簡潔な記述である。
 - *イエスの優位性を証明している。

- (2) エリサベツは、「月が満ちて」男の子を産んだ。

①創 21 : 2～3

Gen 21:2 サラは身ごもり、神がアブラハムに告げられたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

Gen 21:3 アブラハムは、自分に生まれた子、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。

②ルカ 2 : 6～7

Luk 2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

Luk 2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

2. 58 節

Luk 1:58 近所の人たちや親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださったことを聞いて、彼女とともに喜んだ。

(1) ユダヤ人の習慣によって、近所の人たちや親族がお祝いに集った。。

①ルカ 15 : 5～6

Luk 15:5 見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、

Luk 15:6 家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うでしょう。

②息子の誕生、割礼、命名などは、祝いの典型的な例である。

③近所の人々や親族は、彼女とともに喜んだ。

④ちなみに、イエス誕生の際には、羊飼いたちが祝いに駆けつける。

(2) 文法的考察

①「主がエリサベツに大きなあわれみをかけてくださった」

*主の業は終わっている（アオリスト形）。

②「彼女とともに喜んだ」

*喜びは共有され、継続している（未完了形）。

II. 割礼と命名（59～64 節）

1. 59 節

Luk 1:59 八日目になり、人々は幼子に割礼を施すためにやって来た。彼らは幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、

(1) ユダヤの伝統では、隣人たちは誕生から割礼まで、毎晩集った。

①つまり、8 日間集ったということである。

(2) ザカリヤとエリサベツは、律法の命令を忠実に守った。

①創 21 : 4

Gen 21:4 そしてアブラハムは、神が命じられたとおり、生後八日になった自分の子イサクに割礼を施した。

- ②男子の誕生は、家系が継続するための必須条件であった。
- ③幼子は、アブラハム契約のしるしとして、8 日目に割礼を受ける。
- ④当時は、父親が息子に割礼を施していた。
- ⑤イエスも 8 日目に割礼を受けた（ルカ 2：21）。

Luk 2:21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

- ⑥パウロも 8 日目に割礼を受けた（ピリ 3：5）。

Php 3:5 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、

- ⑦この習慣は、今も続いている。モヘルと呼ばれる専門のラビが執刀する。

(3) 割礼時の命名

- ①誕生直後の命名が普通であったが、ここでは割礼時の命名になっている。
- ②ローマ人たちは、誕生後 8 日目（息子）か 9 日目（娘）に命名していた。
- ③ギリシア・ローマ文化の影響がユダヤ人たちに及んでいた可能性がある。
- ④長男は祖父の名を受け継ぐのが慣例であった。
- ⑤例外的に、父の名を受け継ぐこともあった。

*その場合は、「ザカリヤ・ベン・ザカリヤ」となる。

2. 60 節

Luk 1:60 母親は「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。

- (1) 最終的な決定権は、父親にある。

- ①ここでは、母親（エリサベツ）が口をはさんでいる。

- (2) 彼女は、ザカリヤという名を強く拒んだ。

- ①「いいえ」は、非常に強い否定の言葉「ウーキ」である。
- ②「名はヨハネとしなければなりません」
- ③夫ザカリヤから筆談で、天使の御告げについて聞かされていたのである。

2. 61～62 節

Luk 1:61 彼らは彼女に「あなたの親族には、そのような名の人はいません」と言った。

Luk 1:62 そして、幼子にどういう名をつけるつもりか、身振りで父親に尋ねた。

- (1) 近所の人たちや親族は、それに反対した。

- ①これは、母親の意見である。
- ②親族にそのような名の人がない。
 - *これは、系図を意識したことばである。
 - *さらに、先祖への敬意を表したことばである。
- ③彼らは、善意で反対しているのである。

(2) そこで人々は、父親に問いかけた。

- ①身振り手振りで尋ねた。
- ②ザカリヤは依然として、聾啞状態にあったことが分かる。

3. 63 節

Luk 1:63 すると彼は書き板を持って来させて、「その子の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。

- (1) ザカリヤは、「その子の名はヨハネ」と書いた。
 - ①書き板とは、木の板にロウを被せたもの。通常は、鉄のペンを使用した。
 - ②ザカリヤは、エリサベツが提案した名と同じ名を書いた。
 - ③これは、天使から命じられた名前である。
 - ④それを見て、人々は驚いた。

4. 64 節

Luk 1:64 すると、ただちにザカリヤの口が開かれ、舌が解かれ、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

- (1) ザカリヤの舌が直ちに癒された。
 - ①彼は 9 か月間聾啞状態にあったが、それがたちどころに癒された。
 - ②彼が最初にしたことは、神をほめたたえることである。
 - ③人々にとっては、これはヨハネと命名したこと以上に驚きであった。

(2) 先行例として、エゼキエルの体験がある（エゼ 33 : 21～22）。

Eze 33:21 私たちが捕囚となって十二年目の第十の月の五日、エルサレムから逃れた者が私のもとに来て、「都は占領された」と言った。

Eze 33:22 その逃れた者が来る前の夕方に、【主】の御手が私の上にあり、朝になって彼が私のもとに来る前に、私の口は開かれた。こうして私の口は開かれて、もはや私は黙っていなかった。

- ①エゼキエルは、7 年間沈黙していた。
- ②彼の預言（エルサレム崩壊）は成就した。
- ③エルサレム崩壊の知らせを告げる者が来る前の夕方に、彼の口は開かれた。

④エゼキエルは、約束の地に残された者たちに向かって預言を語り始めた。

Ⅲ. 人々の反応（65～66 節）

1. 65 節

Luk 1:65 近所に住む人たちはみな恐れを抱いた。そして、これらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体に語り伝えられていった。

(1) 人々は、みな恐れを抱いた。

①これは恐怖心ではなく、畏怖の念である。

②この子は、並の子ではないという噂が急速に広がった。

③ユダの山地全体（エルサレム近郊）に広がり、人々はそれを話題にした。

2. 66 節

Luk 1:66 聞いた人たちはみな、これらのことを心にとどめ、「いったいこの子は何になるのでしょうか」と言った。主の御手がその子とともにあったからである。

(1) 人々は、この子の将来を想像し、大きな期待を持った。

①人々は、主の御手がその子とともにあることを確認した。

(2) 約 30 年後にヨハネが奉仕を開始したとき、人々はこの物語を覚えていた。

①マタ 3：5～6

Mat 3:5 そのころ、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川周辺のすべての地域から、人々がヨハネのもとにやって来て、

Mat 3:6 自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。

結論：ザカリヤの信仰から学ぶ。

1. 不信仰と信仰の対比

(1) 不信仰のゆえに舌が動かなくなった。

①神殿から出て来たとき、人々を祝福する祈りを唱えることができなかった。

(2) 信仰のゆえに舌が自由になった。

①真っ先に、神をほめたたえた。

2. 伝統と新しい道の対比

(1) 伝統に従えば、祖父か父の名を息子につけるのは当然のことである。

①近所の人たちや親族は、善意のゆえにそう勧めた。

(2) ザカリヤは、伝統を捨て、新しい道を選んだ。

①ヨハネとは、「ヤハウエは恵み深い」という意味である。

②ヨハネの誕生は、恵みの時代の到来を告げている。

③それゆえ、新しい名前が必要である。

④恵みの時代は、律法の時代とは断絶した新しい時代である。

(3) 信仰の父アブラハムは、伝統を捨て、新しい道を選んだ。

①ヘブ 11 : 8

Heb 11:8 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

(4) キリストを信じることは、人生の中に新生という断絶をもたらすことである。

①2 コリ 5 : 17

2Co 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

②クリスチャンとは、古い伝統を捨てて、新しい伝統を作る人である。

ルカの福音書 07 回

ザカリヤの賛歌

ルカ 1 : 67～80

1. はじめに

- (1) 前は、「ヨハネの誕生」について学んだ。
- (2) 文脈としては、ヨハネとイエスの対比が続いている。
 - ①誕生の告知
 - ②実際の誕生物語
 - ③人々の喜び
- (3) この対比は、ヨハネよりもイエスのほうが偉大であることを示している。
- (4) ルカ 1 章と 2 章で、5 つの賛歌が登場する。
 - ①エリサベツの預言的言葉（1 : 42～45）
 - ②マリアの賛歌（マグニフィカート）（1 : 46～55）
 - ③ザカリヤの賛歌（ベネディクトゥス）（1 : 68～79）
 - ④天使たちの賛歌（グローリア・イン・エクセルシス・デオ）（2 : 14）
 - ⑤シメオンの賛歌（ヌンク・ディミティス）（2 : 29～30）
- (5) ザカリヤの賛歌の特徴
 - ①ギリシア語では、1 つの長い文である。
 - ②少なくとも 16 箇所が旧約聖書への暗示・言及である。（Alfred Plummer）
 - *詩篇や預言書
 - *マリアの賛歌では、12 箇所がそうである。
 - ③「契約」と「誓い」ということばが強調されている（72～73 節）。
 - *契約に対する神の忠実さが中心テーマである。

2. アウトライン

- (1) 前書き（67 節）
- (2) 賛歌の前半：メシアによる解放（68～75 節）
- (3) 賛歌の後半：ヨハネの役割（76～79 節）
- (4) ヨハネの成長（80 節）

3. 結論

- (1) イエスとヨハネの対比
- (2) 信者の現実的手本としてのザカリヤ

ザカリヤの賛歌について学ぶ。

I. 前書き（67 節）

1. 67 節

Luk 1:67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。

(1) この賛歌は、聖霊に満たされて語る預言である。

①ヨハネは、母の胎にいるときから聖霊に満たされた（15 節）。

②エリサベツは、聖霊に満たされて叫んだ（41 節）。

③祭司ザカリヤも、聖霊に満たされて預言した。

＊不信仰とその裁きから解放された彼は、素晴らしい賛歌を口にした。

(2) ザカリヤの賛歌の役割

①天使ガブリエルは、ヨハネはメシアの先駆者だと予告した（15～17 節）。

②マリアの賛歌は、イエスの誕生は終末的希望の成就だと歌った（46～55 節）。

③ザカリヤの賛歌は、メシアとヨハネの協力関係について歌っている。

II. 賛歌の前半：メシアによる解放（68～75 節）

1. 68 節 a

Luk 1:68a 「ほむべきかな、イスラエルの神、主。

(1) これは、詩篇や預言書にたびたび登場する表現である。

①マリアの賛歌も、同様のことばで始まっている。

②新約聖書の書簡にも、同様の表現がある。

＊エペ 1：3～10、2 コリ 1：3～4、1 ペテ 1：3～5

(2) ザカリヤは、イスラエルの神、主をほめる（賛美）する理由を挙げる。

①メシアによって、終末的希望である「解放」が成就する。

2. 68b～70 節

Luk 1:68b 主はその御民を顧みて、贖いをなし、

Luk 1:69 救いの角を私たちのために、／しもべダビデの家に立てられた。

Luk 1:70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して／語られたとおりに。

(1) 時制は、未来完了形、つまり預言的完了形である。

①マリアの賛歌でも、未来完了形が用いられていた。

(2) 神はイスラエルの民を顧みてくださった。

①創 21：1（サラ）

②出 4：31（イスラエルの子ら）

③ゼカ 10：3（ユダの家）

④使 15 : 14（異邦人）

Act 15:14 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、彼らの中から御名のために民をお召しになったかについては、シメオンが説明しました。

(3) 「贖いをなし」とは、外的解放と内的解放を含む。

①「救いの角」とは、メシアのことである。

*角を持った動物の力は、その角にある。

②詩 18 : 2

Psa 18:2 【主】はわが巖 わが砦 わが救い主／身を避けるわが岩 わが神。／わが盾 わが救いの角 わがやぐら。

(4) 救いの角とは、ヨハネではなく、ダビデの家系から登場する人物である。

①ザカリヤは、マリアが 3 か月滞在したので、イエスのことを知っていた。

②彼は、イエスとヨハネが同じ計画の 2 つの部分であることを理解していた。

③今起きている出来事は、新しい宗教の創設ではない。

④ヨハネとイエスの誕生によって、イスラエルの民の解放の預言が成就した。

3. 71～73 節

Luk 1:71 この救いは、私たちの敵からの、／私たちを憎むすべての者の手からの救いである。

Luk 1:72 主は私たちの父祖たちにあわれみを施し、／ご自分の聖なる契約を覚えておられた。

Luk 1:73 私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。

(1) 「私たちの敵」「私たちを憎むすべての者」は、政治的な敵以上の者である。

①アブラハムへの誓いの成就（創 22 : 16～18）

Gen 22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて誓う——【主】のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しまなかったので、

Gen 22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

Gen 22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

(2) 72～73 節の強調点は、「契約」と「誓い」である。

①父祖たちと結んだ契約を覚えておられた。

②アブラハムに誓われた誓いを覚えておられた。

(3) 72～73 節と 3 人の名前の関係 (G. Campbell Morgan)

- ①ヨハネー主のあわれみ (72 節)
- ②ザカリヤー主は覚えている (72 節)
- ③エリサベツー神の誓い (73 節)

4. 74～75 節

Luk 1:74 主は私たちが敵の手から救い出し、／恐れなく主に仕えるようにしてくださる。

Luk 1:75 私たちのすべての日々において、／主の御前で、敬虔に、正しく。

(1) 外的解放

- ①イスラエルの敵からの解放が与えられる。
- ②恐れなく主に仕えるようになる。

(2) 内的解放

- ①主の御前で、敬虔に、正しく生きるようになる。

Ⅲ. 賛歌の後半：ヨハネの役割 (76～79 節)

1. 76～77 節

Luk 1:76 幼子よ、あなたこそ／いと高き方の預言者と呼ばれる。／主の御前を先立って行き、その道を備え、

Luk 1:77 罪の赦しによる救いについて、／神の民に、知識を与えるからである。

(1) ザカリヤは、直接幼子に呼びかけている。

- ①幼子は、「いと高き方の預言者」と呼ばれる。
- ②幼子は、メシアの先駆者としての働きをする。

*イザ 40 : 3、マラ 3 : 1、4 : 5

Mal 3:1 「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。／彼は、わたしの前に道を備える。／あなたがたが尋ね求めている主が、／突然、その神殿に来る。／あなたがたが望んでいる契約の使者が、／見よ、彼が来る。／——万軍の【主】は言われる。」

③救いの内容について、神の民に、知識（体験）を与える。

*罪の赦しによる救い。

*メシアは政治的メシアではない。

④救いを教えることが、先駆者の究極的使命である。

2. 78～79 節

Luk 1:78 これは私たちの神の深いあわれみによる。／そのあわれみにより、／曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、

Luk 1:79 暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、／私たちの足を平和の道に導く。」

(1) メシアの到来が、曙の光にたとえられている。

①「曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ」とは、メシアの到来のこと。

②イザ 60 : 19 参照

Isa 60:19 太陽はもはや、あなたの昼の光とはならず、／月の明かりもあなたを照らさない。
／【主】があなたの永遠の光となり、／あなたの神があなたの輝きとなる。

③この光は、異邦人の上にも輝くようになる。

(2) ザカリヤは、単に息子の誕生を喜んでいるだけではない。

①メシアの到来と関連づけて、息子の誕生を喜んでいるのである。

IV. ヨハネの成長 (80 節)

1. 80 節

Luk 1:80 幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。

(1) ヨハネは、両親亡き後、ユダの山地近辺の荒野に住んだ。

①若い時から、預言者エリヤのような生活を選んだ。

②自分がエリヤのような奉仕をすることを認識していた。

③荒野は、黙想する地である。

④ルカ 3 : 2

Luk 3:2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。

(2) これは、イエスの成長物語と似ている。

①ルカ 2 : 40

Luk 2:40 幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがある上にあつた。

②2 人の子どもは、30 年後に同じ神の計画を進める働きに合流する。

結論

1. イエスとヨハネの対比

(1) 2 人の幼子は、ともに同じ神の計画を担う。

①ザカリヤは、ヨハネの誕生によって新しい時代が到来したことを知った。

②マリアも、イエスの誕生によって同じ確信を持った。

(2) ヨハネに対するイエスの優位性が強調されている。

①誕生物語の対比

* ヨハネは 1 : 57～58 までの 2 節。

*イエスは 2 : 1~20 までの 20 節。

②呼称の対比

*ヨハネは「いと高き方の預言者」（76 節）である。

*イエスは「聖なる者」、「神の子」（35 節）である。

③ヨハネをイエスと同列に論じてはならない。

*ヨハネの偉大さを確信している人たちへのルカからの警告である。

2. 信者の手本としてのザカリヤ

(1) ザカリヤは、信者の現実的な手本である。

- ①彼は、旧約的な意味での義人である。
- ②彼は、信仰によって救われていた。
- ③しかし彼は、不信仰のゆえに聾啞状態に陥った。
- ④これは、救いの喪失ではなく、神からの訓練である。
- ⑤神のことばを認めた時に、聾啞状態から解放された。

(2) 悔い改めた者には、再び奉仕の機会が与えられる。

- ①私たちにも同じことが起こる。
- ②罪を犯すと、「信仰のことば」を失う。
- ③解決策は、1 ヨハ 1 : 9 である。

1Jn 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

ルカの福音書 08 回

イエスの誕生

ルカ 2：1～7

1. はじめに

- (1) 文脈としては、ヨハネとイエスの対比が続いている。

①誕生の告知

②実際の誕生物語

③人々の喜び

- (2) この対比は、ヨハネよりもイエスのほうが偉大であることを示している。

- (3) マタイはイエスの誕生を簡単に扱っている。

①マタ 1：24～25

Mat 1:24 ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、

Mat 1:25 子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。

- (4) ルカは、イエスの誕生物語を詳細に記している。

①ルカの福音書 2 章の資料は、ルカだけが取り上げているユニークな情報である。

②ヨハネの誕生物語では、命名の経緯に強調点があった。

③イエスの誕生物語では、誕生の状況に強調点がある。

2. アウトライン

- (1) ベツレヘムでの出産の政治的背景（1～3 節）

- (2) ベツレヘムとダビデの関係（4～5 節）

- (3) ベツレヘムでのみすばらしい始まり（6～7 節）

3. 結論

- (1) 歴史観

- (2) ダビデ契約

- (3) 受難の予表

イエスの誕生について学ぶ。

I. ベツレヘムでの出産の政治的背景（1～3 節）

1. 1 節

Luk 2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。

- (1) 「そのころ」とは、ヨハネが誕生した時期への言及である。

①皇帝アウグストゥスが住民登録の勅令を出した。

②アウグストゥスの治世は、前 27 年～紀元 14 年である。

＊アウグストゥスとは、オクタヴィアヌスのことである。

＊彼は、ユリウス・カエサルの甥に当たる。

＊カエサルの死後、ローマ帝国初代の皇帝となった。

③アウグストゥスとは、称号である。

＊「崇高なる者」、「大いなる者」という意味。

＊前 27 年、元老院がこの称号を送った。

(2) 住民登録は、徴税を目的として行われた。

①全世界とは、ローマ帝国内のことである。

②徴税に用いる住民台帳を作成するためのもので、徴税そのものではない。

2. 2 節

Luk 2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。

(1) ルカの記述は不正確であるとの批判があった。

①ヘロデ大王は前 4 年に死んだので、イエスの誕生はそれ以前のこととなる。

②ところが、キリニウスがシリアの総督であったのは紀元 6 年以降である。

③この 2 つの年代は、矛盾する。

④実際は、キリニウスは 2 度シリアの総督を勤めたので、矛盾ではない。

⑤前 10～7 年、キリニウスはシリアの軍事担当総督であった（W・M・ラムゼー）。

⑥この住民登録は、前 8 年に行なわれたものである。

⑦実際の登録作業は、行政単位ごとに行われた。

⑧つまり、帝国内同時にということではなく、地域によって時間差があった。

3. 3 節

Luk 2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。

(1) 「自分の町」の意味

①住んでいる町という意味。「ガリラヤの自分たちの町ナザレ」（ルカ 2 : 39)

②先祖の町という意味

＊ヨセフの先祖はダビデである。

＊ベツレヘムは、ダビデが誕生した町で、ダビデの町と呼ばれた。

＊家族の戸籍が保管されている町

(2) 「登録するために」

①家族ごとの戸籍が記されたパピルスが、エジプトで発掘されている。

②ヨセフの家族の戸籍は、ベツレヘムに保管されていたのであろう。

II. ベツレヘムとダビデの関係（4～5 節）

1. 4 節

Luk 2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

(1) ヨセフはダビデの家系に属している。

①ユダヤのベツレヘムに彼の戸籍があった。

②発掘された陶器によって、ベツレヘムからナザレに移住する人たちがいたことが判明している。

(2) 2 つのベツレヘム

①ナザレの北西 11 キロにある村。ゼブルン族の所有（ヨシ 19：15）

②ユダヤのベツレヘム。エルサレムの南 8 キロにある町

(3) 「ダビデの町」という名称

①旧約聖書では、エルサレムの南の地区を指す（ダビデが建てたエルサレム）。

②ルカの福音書では、ベツレヘムを指す。

③ルカは、ベツレヘムとダビデを関連づけている。

2. 5 節

Luk 2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

(1) 「いいなずけの妻マリア」

①マリアは、法的にはヨセフの妻である。

②しかし、実質的な結婚関係はまだ始まっていない。

(2) マリアが同行した理由は、いくつか考えられる。

①マリアもまた、ベツレヘムで登録する必要があった。

*シリア（パレスチナを含む）では、女子にも人頭税がかけられた。

②ナザレでの噂話为了避免のため。

③出産の時に、ヨセフがそばにすることを願った。

④イエスがメシアであることを知っていたので、ミカ書の預言を意識した。

Mic 5:2 「ベツレヘム・エフラテよ、／あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。／だが、あなたからわたしのために／イスラエルを治める者が出る。／その出現は昔から、／永遠の昔から定まっている。」

⑤いずれにしても、ルカはこの出来事の背後に神の御手を見ている。

Ⅲ. ベツレヘムでのみずぼらしい始まり（6～7 節）

1. 6～7 節 a

Luk 2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

Luk 2:7a 男子の初子を産んだ。

(1) 「月が満ちて」

①ベツレヘムについてどれくらいの時間が経過したかは分からない。

②ルカ 1 : 57 との対比

Luk 1:57 さて、月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

(2) 「男子の初子を産んだ」

①マリアには他の子どもたちがいたことが暗示されている。

②マタ 13 : 55、マコ 3 : 31～35

2. 7 節 b

Luk 2:7b そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

(1) 「布にくるんで」

①長い布で赤子を巻くのは、当時の習慣である。

②寒くないように、また、両腕が真っ直ぐに伸びるように。

③エゼ 16 : 4（エルサレムに関する描写）

Eze 16:4 あなたの生まれについて言えば、あなたが生まれた日に、あなたは、へその緒を切られず、水で洗いきよめられず、塩でこすられず、布で包まれることもなかった。

④通常は、助産婦が立ち会った。

⑤初産のマリアに、助産婦がついた可能性は十分ある。

(2) 「飼葉桶に寝かせた」

①飼葉桶は、家畜（ろば、羊、山羊）に餌を与えるための道具である。

②それが、メシアの揺りかごとになった。

③家畜はその周りにはいない。

④これらの描写は、後に登場する羊飼いたちにとって重要な「しるし」となる。

⑤ルカ 2 : 12

Luk 2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つめます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

- (3) 「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである」
 - ① 「客間には彼らのいる余地がなかったからである」（口語訳）
 - ② 宿屋（ホテル）に空き部屋がなかったという意味ではない。
 - ③ 知り合い（親戚）の家には、空いている客間がなかったということであろう。
 - * 離散した親族が、人口調査のために同じ時期に戻って来たのであろう。
 - ④ 町の外にある自然の洞窟が、家畜の囲い場になっていた。
 - ⑤ メシアは、人間が住む空間ではなく、家畜が住む空間で誕生された。
 - ⑥ イエス誕生の地は、現在の聖誕教会の近辺である。

結論

1. 歴史観

(1) 箴言 21 章 1 節

Pro 21:1 王の心は、【主】の手の中であって水の流れのよう。／主はみこころのままに、その向きを変えられる。

- (2) ルカは、イエスの誕生を世界史の中に位置づけた。
 - ① これを起点に、イエスの誕生には宇宙大の意義があることを示していく。
- (3) アウグストゥスは、「世界に平和をもたらした神聖な救い主」と呼ばれた。
 - ① しかしルカは、アウグストゥス以上の救い主の到来を宣言する。
- (4) 神は、この世の支配者をご自分の目的のために用いる。
 - ① **ネブカデネザル（バビロンの王）**
 - * 彼は、背信の民イスラエルを裁くための神の器である。
 - * しかし、彼もまた、イスラエルを苦しめた罪で裁かれる。
 - ② **キュロス（ペルシアの王）**
 - * 彼は、勅令を出して、イスラエルの民の約束の地への帰還を許可した。
 - ③ **アウグストゥス**
 - * 彼は、ミカ 5:2 の成就のために用いられた。
 - ④ **ヒトラー**
 - * 彼は、600 万人のユダヤ人を殺した。
 - * しかし、イスラエルという国が誕生した。
 - ⑤ **イスラム原理主義の諸国**
 - * その存在が、ユダヤ人を神に向かわせる力となっている。
 - ⑥ **反キリスト**
 - * 大患難時代になると、反キリストはユダヤ人を抹殺しようとする。
 - * しかし、最後にユダヤ人は民族的救いを体験するようになる。

2. ダビデ契約

- (1) ルカは、ベツレヘムの町をダビデと関連づけた。
 - ①ダビデ契約によれば、メシアはダビデの子孫から生まれる。
 - ②メシアは、「ダビデの子」である。
 - ③ヨセフとマリアは、ともにダビデの子孫である。
 - ④ベツレヘムで誕生したヨセフとマリアの息子イエスは、メシアの資格を持つ。

3. 受難の予表

- (1) イエスのみすばらしい始まりは、受難の予表となっている。
 - ①イエスは、王宮ではなく、飼葉桶の中に寝かされた。
 - ②イエスは、貧しい者たちや弱い者たちと 1 つとなられた。
 - ③誕生の時から、イエスには、この世に居場所がなかった。
 - ④この世から拒否された究極的な状態が、十字架刑である。
- (2) ヨハネの福音書 1 章 11～12 節は、このテーマを紹介している。

Joh 1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

Joh 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

- (3) イエスの誕生物語は、あらゆる時代の貧しい者たちに希望を与えてきた。

ルカの福音書 09 回

羊飼いたちへの告知

ルカ 2 : 8～20

1. はじめに

- (1) 文脈としては、ヨハネとイエスの対比が続いている。
 - ①誕生の告知
 - ②実際の誕生物語
 - ③人々の喜び
- (2) この対比は、ヨハネよりもイエスのほうが偉大であることを示している。
- (3) ルカは、イエスの誕生物語を詳細に記している。
 - ①ルカの福音書 2 章の資料は、ルカだけが取り上げているユニークな情報である。
 - ②ヨハネの誕生物語では、命名の経緯に強調点がある。
 - ③イエスの誕生物語では、誕生の状況に強調点がある。
 - *皇帝アウグストゥスが人口調査の勅令を出した。
 - *ヨセフとマリアは、ベツレヘムに帰って行った。
 - *ベツレヘム滞在中に、マリアは赤子を産んだ。
 - *イエスの生涯の始まりは、みすばらしいものであった。
- (4) ここは「人々の喜び」の箇所であるが、主役は予想外の人たちである。
- (5) ルカは、重要な神学的意味を盛り込んでいる。
 - ①天使のことばの中に深い意味がある。
 - ②主役が羊飼いたちであることの中に深い意味がある。

2. アウトライン

- (1) 羊飼いたちへの告知（8～12 節）
- (2) 天使たちの賛美（13～14 節）
- (3) 最初の幼子礼拝（15～20 節）

3. 結論

- (1) 天使のことばの神学的意味
- (2) 羊飼いたちの存在の神学的意味

羊飼いたちへの告知について学ぶ。

I. 羊飼いたちへの告知（8～12 節）

1. 8 節

Luk 2:8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

(1) 「その地方」とは、ベツレヘム近郊のことである。

①町は丘陵地にあり、その周辺に放牧地帯が広がっていた。

(2) 羊飼いたちは、野宿をしながら羊の群れの夜番をしていた。

①複数形なので、順番を決めて夜番をしていたのであろう。

②ダビデもまた、町の郊外で羊飼いをしていた（1サム 17：34～35）。

1Sa 17:34 ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、

1Sa 17:35 しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。

③野宿しているので、さほど寒くない気候だったことが分かる。

④しかし、幼子誕生の日が 12 月でないと断言はできない。

(3) ベツレヘムはエルサレムに近かった。

①ベツレヘム近郊の羊飼いたちは、神殿で献げる小羊を飼っていた。

②これらの羊飼いたちは、過越の祭りで献げる小羊を飼っていたとの主張がある。

③これは、断言できることではなく、あくまでも推測である。

2. 9 節

Luk 2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

(1) これまでの 2 つの告知には、似たパターンがあった。

①ザカリヤへの告知（1：13～20）

＊天使ガブリエルがザカリヤに現れた。

＊ザカリヤは、取り乱し、恐怖に襲われた。

②マリアへの告知（1：28～37）

＊天使ガブリエルがマリアに現れた。

＊マリアは、ひどく戸惑って、なんのあいさつかと考え込んだ。

(2) 羊飼いたちへの告知にも、同じパターンが見られる。

①ひとりの天使の天使が彼らのそばに立った。

＊天使の名は出ていないが、ガブリエルかもしれない。

＊主の栄光（シャカイナグローリー）が周りを照らした。

＊これは、メシア誕生に伴うシャカイナグローリーである。

- * 預言者エゼキエルの時代に、シャカイナグローリーは神殿から去った。
- * ヘロデが拡張した神殿には、シャカイナグローリーはなかった。
- * 約 500 年ぶりにシャカイナグローリーがイスラエルの民の間に宿った。
- * これは、メシアの到来を告げるシャカイナグローリーである。

②羊飼いたちは、非常に恐れた。

- * 直訳は、「大いなる恐れを恐れた」となる。
- * 文語訳は、「甚(いた)く懼(おそ)る」となっている。
- * シャカイナグローリーに包まれたのであるから、恐れるのは当然である。
- * 神が歴史に介入されるとき、人は大いに恐れる（旧約聖書のパターン）。

(3) 似たようなことがペテロの生涯にも起こった（使 12 : 7）。

Act 12:7 すると見よ。主の使いがそばに立ち、牢の中を光が照らした。御使いはペテロの脇腹を突いて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。

3. 10 節

Luk 2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。

(1) これは、励ましのことばである。

- ①「恐れることはありません」。ザカリヤとマリアも、同じことばを聞いた。
- ②恐れる必要がないという理由は、天使がもたらしたのは喜びの知らせだから。
- ③「この民全体」とはイスラエル人のことである。
 - * 「民」とはギリシア語でラオスである。
 - * イエスは、第一義的にはユダヤ人のメシアとして来られた。
 - * ルカは、全人類の救いという構想を持っていた。
 - * 使徒の働きに入ると、その構想が明らかになる。

4. 11 節

Luk 2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

(1) 天使は、メシアが誕生した日に、喜びの知らせをもたらした。

- ①この日は、メシアによる救いの始まりの日である。
- ②救い主は、「ダビデの町」で生まれた。
 - * 「ダビデの町」とは、ベツレヘムである。
 - * 「ダビデの町」という名称は、ダビデ契約が成就したことを示している。

(2) 今日ということばは、ルカの福音書では重要な意味を持っている。

①4:21 ナザレの会堂にて

「今日、この聖書のことばが実現しました」

②5:26 中風の人癒しについて

「私たちは今日、驚くべきことを見た」

③19:5 エリコにて

「わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから」

④19:9 ザアカイの家にて

「今日、救いがこの家に来ました」

⑤22:61 イエスを否んだペテロに対して

「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」

⑥23:43 十字架上にて

「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」

(3) 天使は、幼子に関して3つのタイトルを使用した。

①救い主

②キリスト

③主

5. 12 節

Luk 2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」

(1) 幼子を見つけるための「しるし」が与えられた。

①「しるし」となるためには、極めて稀なものでなければならない。

＊布にくるまっている。

＊飼葉桶に寝ている。

②羊飼いたちは、周辺にある洞窟をよく知っていた。

II. 天使たちの賛美 (13～14 節)

1. 13 節

Luk 2:13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

(1) おびたしい数の天の軍勢が現れた。

①「軍勢」（スツラティア）は、軍事用語である。

- ②無数の天使たちが、神を賛美し、平和を宣言した。
- ③賛美は、被造物にとって自然な行為である。
- ④天使たちもまた、被造物である。

2. 14 節

Luk 2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。／地の上で、平和が／みこころにかなう人々にあるように。」

(1) これはヘブルの対句法である。

①いと高き所で — 地の上で

＊いと高き所とは、第 3 の天（神の臨在の場）である。

②栄光が — 平和が

③神にあるように — 御心にかなう人々にあるように

＊御心にかなう人々とは、神に信頼を置く人々である。

Ⅲ. 最初の幼子礼拝（15～20 節）

1. 15 節

Luk 2:15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

(1) 羊飼いたちの応答

①彼らは、天使の御告げを神のことばだと理解した。

②また、ダビデの町をベツレヘムだと理解した。

③彼らは、ただちに行動を起こした。

④これは、マリアがエリサベツを訪問したのと同じ姿勢である。

⑤エルサレムにいた宗教的指導者たちとは対照的である（マタ 2:5）。

Mat 2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。

2. 16～17 節

Luk 2:16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

Luk 2:17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

(1) 「捜し当てた」というのは、発見のする前に捜す行為があったということである。

①彼らは、「しるし」を知っていたので、発見することができた。

(2) 羊飼いたちは、マリアとヨセフ以外の人々にも、自分たちに告げられたことを伝えた。

①彼らは、メシア到来の知らせを伝える最初の人となった。

3. 18～20 節

Luk 2:18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。

Luk 2:19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

Luk 2:20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

(1) 羊飼いたちの話聞いた人たちはみな、驚いた。

- ①天使が現れ、シャカイナグローリーが輝いた。
- ②救い主として誕生した幼子を見つけるためのしるしが与えられた。
- ③来てみると、天使の話のとおりであった。

(2) マリアは、より深い理解を持っていた。

- ①「思い巡らす」とは、いくつかの出来事を比較し、その重要性を推し量ること。
- ②彼女はこれを継続して行っていた。
- ③メシアの母の大いなる期待と不安がここに見られる。

(3) 羊飼いたちは、天に帰った天使たちの賛美を引き継いで神を賛美した。

- ①彼らは、羊の群れのところに帰って行った。
- ②羊の番をすることも礼拝である。

結論

1. 天使のことばの神学的意味

Luk 2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

(1) 救い主（ソテイア）

- ①ローマ帝国では、皇帝を「救い主」と呼ぶようになっていた。
- ②クリスチャンがその称号をキリストに適用した。
- ③自分は罪人だという認識があつて初めて、この方は「救い主」となる。

(2) キリスト（クリストス）

- ①「油注がれた者」という称号である。
- ②ヘブル語では「メシア」である。
- ③この称号は、信者にとって最も重要なものとなる。
- ④救い主は、イエス・キリストと呼ばれるようになる。
- ⑤信者は、クリスチャンと呼ばれるようになる（使 11：26）。
- ⑥私たちは、キリストにあつて救いを得ている。

(3) 主（キュリオス）

①旧約聖書のヤハウェである。

②羊飼いたちは、この称号の意味を十分に理解はしていなかった。

③マリアもまた同様である。

＊時として彼女の信仰は、揺らいだ（ルカ 8：19。母と兄弟たち）。

＊マリアの理解がはっきりするのは、復活後である。

④ピリ 3：20

Php 3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。

＊救い主であるイエスは、メシアでありヤハウェである。

＊この方によって、私たちの国籍は天に登録されている。

2. 羊飼いたちの存在の神学的意味

(1) メシア誕生の知らせは、まず羊飼いたちにもたらされた。

①羊飼いの実態（童話的なイメージではない）

②律法に無知、儀式的に汚れている、嘘つき、盗人

③取税人や遊女と同じように、社会的のけ者である。

(2) ここには、逆転の真理がある。

①マリア自身が体験したこと

②マリアの賛歌に歌われていた（1：51～55）。

(3) イエス自身が、貧しい者たちとひとつになってくださった。

①主イエスは、貧しくても忠実に働いている人たちのところに来てくださる。

ルカの福音書 10 回
イエスの割礼とマリアの清め
ルカ 2 : 21～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①皇帝アウグストゥスによる人口調査の勅令
- ②ベツレヘム滞在中の出産
- ③羊飼いたちへの告知
- ④誕生後の 40 日間の出来事
 - *イエスの割礼
 - *マリアの清め
 - *敬虔な人シメオンの預言
 - *女預言者アンナの伝道

2. アウトライン

- (1) イエスの割礼 (21 節)
- (2) マリアの清め (22～24 節)

3. 結論

- (1) ガラテヤ人への手紙 4 章 4～5 節
- (2) ガラテヤ人への手紙 5 章 3 節

イエスの割礼とマリアの清めについて学ぶ。

I. イエスの割礼 (21 節)

1. 21 節

Luk 2:21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。

(1) バプテスマのヨハネとイエスの対比

- ①8 日目の割礼
- ②命名
- ③すでに天使によって告げられていた名が付けられた。

(2) イエスの割礼

- ①8 日目に行われた。

②レビ 12 : 3

Lev 12:3 八日目には、その子の包皮の肉に割礼を施す。

③ヨセフとマリアは、律法に忠実に従った。

④割礼の意味

*割礼は、アブラハム契約のしるしである。

*割礼は、ユダヤ人を異邦人から区別するしるしである。

*割礼によって、イエスは律法の下に置かれた。

・律法全体を行う義務が生じた。

(3) イエスの命名

①イエスという名は、受胎前にマリアに告知された（ルカ 1 : 31）。

②同じ名が、受胎後にヨセフに告知された（マタ 1 : 21）。

③イエスはヘブル語でヨシュア。「主は救い」という意味である。

④これは、幼子の働きの内容を描写した名前である。

(4) イエスの将来の預言

①ヨハネの場合は、割礼の直後に将来の預言が与えられた（父ザカリヤ）。

②イエスの場合は、神殿に上った時に預言が与えられる（シメオン）。

II. マリアの清め (22～24 節)

1. 誕生後の 40 日間の規定（レビ 12 : 2～4）

Lev 12:2 「イスラエルの子らに告げよ。／女が身重になり、男の子を産んだとき、その女は七日の間汚れ、月のさわりの不浄の期間と同じように汚れる。

Lev 12:3 八日目には、その子の包皮の肉に割礼を施す。

Lev 12:4 彼女は血のきよめのために、さらに三十三日間こもる。そのきよめの期間が満ちるまでは、いかなる聖なるものにも触れてはならない。また聖所に入ってはならない。

(1) 男の子を産んだ場合は、母親は 7 日間汚れる。

①これは、祭儀的な汚れであって、罪の結果ではない。

②女の子を産んだ場合は、2 週間汚れる。

(2) 8 日目に、誕生した子に割礼を施す。

①8 日目は、新生児の免疫力が最も高まる時である。

(3) 母親は、33 日間家にこもる。

①実際は、出産した婦人への恵みの期間である。

②女の子を産んだ場合は、66 日間こもる。

2. 40 日が満ちた時、ささげ物を献げる（レビ 12：6～8）。

Lev 12:6 彼女のきよめの期間が満ちたら、息子の場合であっても娘の場合であっても、全焼のささげ物として一歳の子羊一匹と、罪のきよめのささげ物として家鳩のひなか山鳩を一羽、会見の天幕の入り口にいる祭司のところに持って行く。

Lev 12:7 祭司はこれを【主】の前に献げ、彼女のために宥めを行い、彼女はその出血の汚れからきよくなる。これが、男の子であれ女の子であれ、子を産む女についてのおしえである。

Lev 12:8 しかし、もし彼女に羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のささげ物、もう一羽は罪のきよめのささげ物とする。祭司は彼女のために宥めを行い、彼女はきよくなる。」

①母親の清めのために、いけにえを献げることが命じられている。

②全焼のささげ物は、1 歳の子羊 1 匹。

*「全焼のささげ物」は、ギリシア語で「ホロコースト」である。

③罪のきよめのささげ物は、家鳩のひなか山鳩 1 羽。

④これらのいけにえを神殿の入り口にいる祭司のところに持って行く。

⑤祭司は、これを主の前に献げ、彼女のために宥めを行う。

⑥貧者のための例外規定

*2 羽の山鳩か、2 羽の家鳩のひなを取る。

*1 羽は全焼のささげ物、もう 1 羽は罪のきよめのささげ物とする。

3. 22～24 節

Luk 2:22 そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。

Luk 2:23 それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。

Luk 2:24 また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。

(1) 2 つのテーマが交差対句法で紹介されている（キアスモス、キアズム）。

①マリアは、清めのためにエルサレムに上った。

②これがイエスを主に献げる機会となった。

③キアズムの内容

A マリアの清め（22 節 a）

B イエスの奉献（22 節 b）

B イエスの奉献（23 節）

A マリアの清め (24 節)

(2) マリアの清め

- ①ヨセフとマリアは、レビ記 12 章の規定に従っている。
- ②「彼らのきよめの期間」とあるのは、夫婦が一体であることを示している。
- ③場所は、婦人の庭からイスラエルの庭に入るためのニカノルの門 (15 段ある)。
- ④マリアは、貧者のための例外規定に従った。
 - *イエスが貧しい家に生まれたことが分かる。
 - *東方の博士たちは、まだベツレヘムに到着していなかったことが分かる。
- ⑤マリアは、その賛歌の中で、自分は救い主を必要としていると歌った。
- ⑥罪人である彼女は、清めを受けるためにいけにえを献げる必要があった。
 - *彼女は、2 羽の鳩に手を置いてから、それを祭司に渡す。
 - *祭司は鳩を祭壇の所に運び、1 羽の首を絞め、罪の清めのささげ物とする。
 - *さらに、もう 1 羽を祭壇で焼いて全焼のささげ物とする。
- ⑦聖書には、イエスがいけにえを献げたという記録は出て来ない。

(3) イエスの奉献

①出 13 : 2

Exo 13:2 「イスラエルの子らの間で最初に胎を開く長子はみな、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それは、わたしのものである。」

②出 13 : 15

Exo 13:15 ファラオが頑なになって、私たちが解放しなかったとき、【主】はエジプトの地の長子をみな、人の長子から家畜の初子に至るまで殺された。それゆえ私は、最初に胎を開く雄をみな、いけにえとして【主】に献げ、私の子どもたちの長子をみな贖うのだ。』

③長子の贖いの代価は、銀 5 シェケルである (民 18 : 15~16)。

④ところが、両親は贖い金を支払ったとは書かれていない。

⑤旧約聖書の例：サムエルの母ハンナの告白 (1 サム 1 : 27~28)

1Sa 1:27 この子のことを、私は祈ったのです。【主】は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。

1Sa 1:28 それで私もまた、この子を【主】におゆだねいたします。この子は一生涯、【主】にゆだねられたものです。」こうして彼らはそこで【主】を礼拝した。

⑥ヨセフとマリアは、イエスを神に捧げたのである。

結論

1. ガラテヤ人への手紙 4 章 4~5 節

Gal 4:4 しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。

Gal 4:5 それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした。

(1) 割礼も母親の清めも、人間は罪の中にあって誕生することを示している。

- ①アダム以来、人間は不完全な状態で誕生する。
- ②割礼は、アブラハム契約のしるしであり、モーセの律法の要求でもある。
- ③神の子は、人となられた。
- ④神の子は、律法の下にある者として派遣された。
- ④神の子は、割礼を受けられた。

＊割礼によって、神の子は自らをユダヤ人と一体化された。

・「律法の下にある者」（ユダヤ人）を贖い出すため。

＊割礼によって、神の子は自らを人類全般と一体化された。

・すべての罪人を救うため。

(2) 神の子の受肉は、神の子の辱めである。

- ①イエスの受肉状態は今も続いている。
- ②辱めの期間は終わった。

2. ガラテヤ人への手紙 5 章 3 節

Gal 5:1 キリストは、自由を得させるために私たちに解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。

Gal 5:2 よく聞いてください。私パウロがあなたがたに言います。もしあなたがたが割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに、何の益ももたらさないことになります。

Gal 5:3 割礼を受けるすべての人に、もう一度はっきり言っておきます。そういう人には律法全体を行う義務があります。

(1) パウロは、律法による救いを否定している。

- ①もし割礼を受けるなら、その人には律法全体を行う義務が生じる。
- ②しかし、律法全体を行うのは不可能なことである。
- ③過去に割礼を受けた人ではなく、救いのために割礼を受ける人のことである。

(2) イエスは割礼を受けた。

- ①そのことによって律法全体を行う義務をその身に引き受けた。
- ②イエスは、律法全体を完璧に守ることができた。
- ③アダムの墮落以来、神の法を完璧に守ったのはイエスだけである。

④それゆえ、イエスはユダヤ人にも異邦人にも、救い主となることができた。

(3) イエスを救い主として信じる者は、義とされる。

①イエスの義が信じる者に転嫁されるのである。

②すべての人は、恵みと信仰によって義とされる。